

景観マネジメント部門



歴史的な造園職能及び景観と人との関係性に関する研究

Studies of Historic Landscape Professionals and relations between scene and people

要約

日本文化や庭園史における結節点であった、中世後期の造園職能に関する研究を学位論文として一連の研究を行った。山水河原者と呼ばれた被差別民がどのように、技術、知見を高めながら、その地位を高めて行ったかや、石垣を積む技術の発展などを検証した。その後、同時代の人と自然、共同体と景観の関係性などについての研究に発展し現在に至っている。

<http://www15.plala.or.jp/h-mayumi/>

研究者

林 まゆみ
HAYASHI Mayumi

中世民衆社会における造園職能民に関する一連の研究では、造園デザインのルーツを探る中で、文化や庭園における一つの結節点であった中世後期の造園職能民の形成に関しての論証を試みた。ここで扱う職人階層はその「民衆」のなかでも最下層に位置づけられていた「非農民」である。その非人社会における階層分化の様相がいわゆる造園職能の形成と深い関係性をもち続けてきたことが理解された。

まず、「造園職能民の形成・・・北野社に見られるみられる事例から」では北野社の史料に注目し、「散所」や「河原者」などの階層がどのように造園職能に携わったかについての検討を試みた。当時の北野社においては、身分的職能分担が確立していたことを検分した。河原者、散所、在家などの各階層はその身分的上下に応じて、清めの職能も分化していた。

次に「造園職能民の完成・・・善阿弥論の再検討」の中では、職能の完成について論じるとともに、善阿弥をもって、山水河原者の完成者或いは到達点とみて、これまでいわれてきた善阿弥論や山水河原者に関する論考を見直した。さまざまな史料にみられるように、善阿弥という人物はある時は施食の領取として集団の長の役割を果たし、あるいは惣中を率いる頭領的存在であったことが伺われる。

さらに「造園職能民の展開・・・京都にみられる他の事例を総合して」では、京都における他の事例を考証した。



① 北野社では清めの領域が分かれていた。



② 非人の輩が法然上人の処刑を担っている。

足利義政の東山山荘の構築に際しては、河原者は四方に走り回る技能者として数多くの史料で見られる。しかし、善阿弥のような固有名詞で呼ばれるよりも、技能者集団として階層的に確立しつつあった存在としてである。賃金面では、河原者が地歩を固めて、次第により多くの対価が支払われる。中世における触穢観や差別観は現代のそれとは異なると考えられる。

また、「造園職能民の発展・・・近畿に見られる石垣を積む職能」では、坂本の穴太以外にも存在した石積み集団に視点を広げ、近畿においてさまざまな戦国大名に仕えた技能集団の形成を論じた。文献史料に留まらず、現地調査に赴き、石積みの手法の分類を通じても諸地域の在りにおける技能者集団の可能性を論証した。

本論文は、造園職能民の形成過程を社会的な背景も視野に入れ、その客観的の掌握につとめた。賤

